

50575

教科書文庫

5
810
41-1947
01304
49844

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

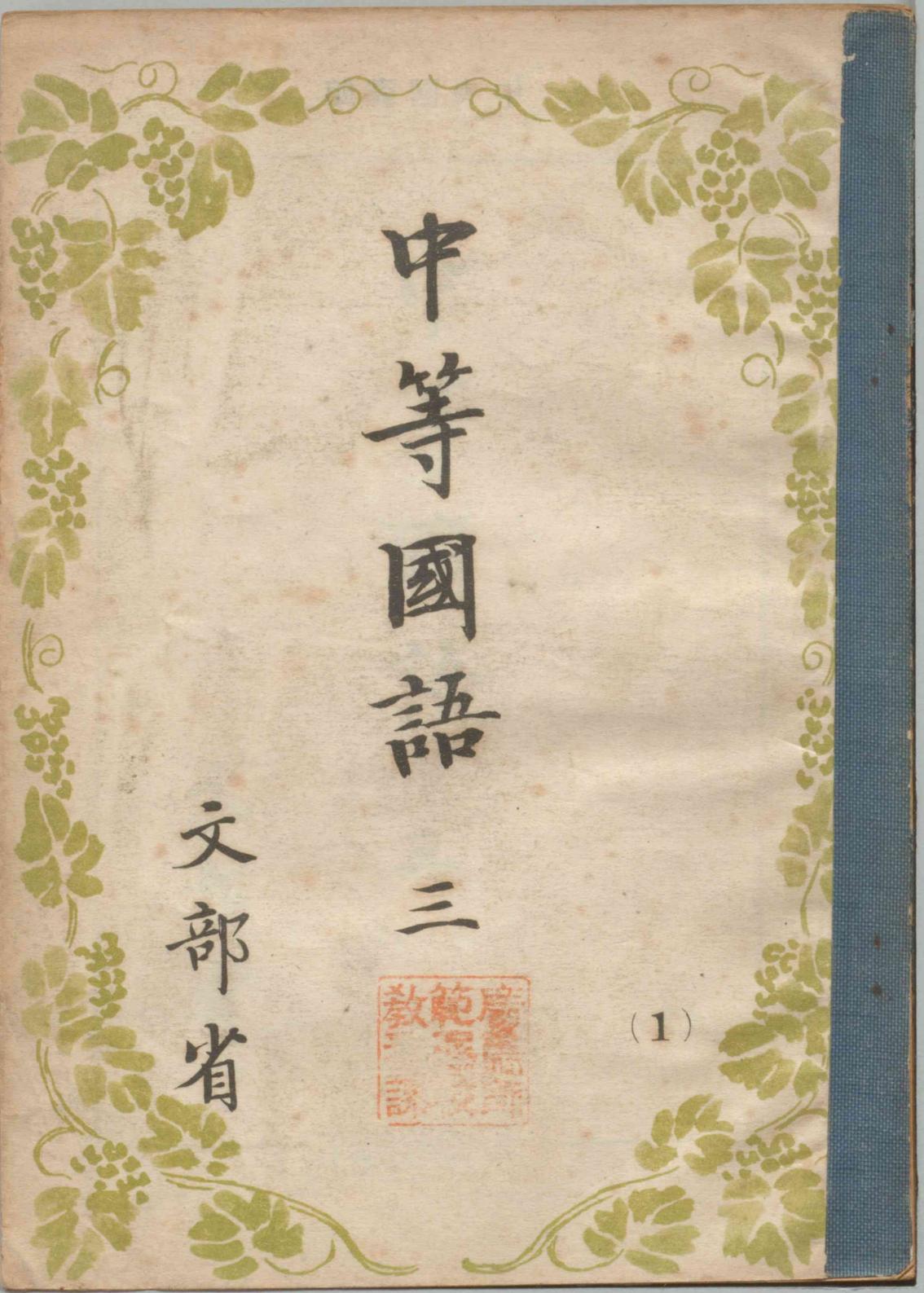
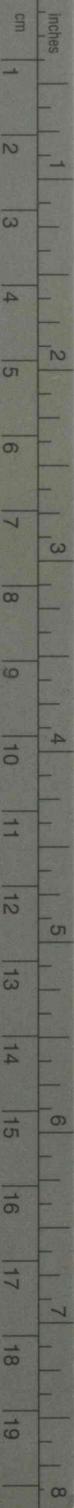


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中等國語 三

文部省



(1)



中央図書館

中等國語 三

文部省

(1)

広島大学図書

0130449844



目録

- 一 天の香具山……………一
- 二 新聞の話……………二
- 三 キューリー夫人……………八
- 四 花より雨に……………十六
- 五 山のあなた……………二十一
- 六 小人國……………二十四
- 七 身振り語と言語……………三十三
- 八 制作の方法……………四十七
- 九 長歌……………五十三
- 十 羽衣……………五十五

一天の香具山

天の香具山 持後

新古今和歌集

春のはじめの歌 後鳥羽天皇御製
 ほのくと春こそ空に來にけらし天の香具山かすみたなびく
晩霞といふことを詠める(老翁上)

なごの海のかすみのまよりながむれば入り日をあらふおきつしら波
詩を作らせて歌に合はせ侍りしに、水郷春望といふことぞ

夕月夜しほ満ち來らし難波江のあしわか葉をこゆるしら波
夏月を詠める(老翁のナニ)

庭のおもはまだかわかぬに夕だちの空さりげなくすめる月かな
入道前關白右大臣に侍りける時、百首歌詠ませ侍りける時、ほととぎすの歌

ひかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙を添へし山ほととぎす
題知らず

心なき身にもあはれは知られけりしきたつ沢の秋の夕ぐれ
一天の香具山

梅、たつ山、秋の夕ぐれ
西行法師

藤原秀能
 藤原実定
後鳥羽天皇御製

源頼政
 藤原俊成
西行法師

西行法師
梅、たつ山、秋の夕ぐれ

二 新聞の話

きりくす夜さむに秋のなるまゝによわるか声の遠ざかりゆく

藤原家隆

和歌所歌合に、湖辺月といふことを

にほのうみや月のひかりのうつろへば波のはなにも秋は見えけり

吉野川岸のやまぶき咲きにけり峰のさくらは散りはてぬらむ

藤原定家

旅の歌として詠める

旅人のそで吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし

百首歌奉りし時

二 新聞の話

人間には、自分の住んでいる所の周囲に起る事件を早く知りたがり、またそれを知った場合は、すぐ他人にこれを知らせたがる本能があります。人類が太古野蛮な時代に、山間・原野に部落を作つて、闘争しながら生活していた時代でも、隣の部落にどういふことが起りつゝあるかを知ることが、興味の上からばかりでなく、かれらにとり自衛上最も必要であつたに相違ありません。隣の部落の酋長が死んだとか、急に弓矢をたくさん作つたとかいふようなことを知つたものは、それを直ちに自分のなかまにふれまわつて歩いたことは容易に想像されます。

新聞の発生は、こうした人間の本能に基づくものであります。人間が文字を使用しはじめた時は、実質的には現代の新聞の第一号が、なんらかの形で、例えば個人間の手紙とか、政府の告示とかに現われ出した時であり、十五世紀の中葉に印刷機がドイツで発明された時は、現代の新聞の形態を持つた新聞が現出する予告の時でありました。

現代の新聞は、イタリア・ドイツ・イギリス・フランス等で、十六世紀の中葉ごろから漸次発達し出したものであります。その創始時代には、いづれも週刊の形で発行され、紙面にはその発行都市を中心として起つた政治上の事件などを主として、聞くがまゝ、見るがまゝ、思うがまゝ、書きつらぬるという程度のものであります。それが漸次発達して、言論機関として勢力を持つようになり、十九世紀以後は、主として政府に対する民間の機関として存在するようになりました。もつとも、時代により、國によつては、いわゆる政府の機関紙もあり、政党のそれもあります。いづれにせよ、世界各國の進歩とともに新聞も急速に発達し、ついに今日のように、どこの國でもその國力の大小強弱、あるいはその特殊性は、そのまゝその國の新聞により代表されるほどもなっています。

日本でも明治維新とともに、現代新聞の機構は西洋文明の一つとして輸入され、第一次世界大戦以後急激に発展し、今日では日本も、発行部数の点から見ても、世界でも一流の域に達しております。

新聞はだいたい以上に述べたような理由で発生し、発達して來たのであります。その発展は十九世紀の中ごろ以後において、ことにめざましいものがあります。その最大の原因は、この期間に世界の多くの文明國では、教育が庶民階級にまで一般に普及しはじめ、人間の知識と知識欲とが全体的に向上し、読む習慣が普遍化したためであります。

昔はこの國でも、読んだり書いたりすることのできるものは、少数の知識階級に限られたものでしたが、それが、ほとんどだれでもできるようになった結果、どこの國でも國民の大多数が新聞を要求するようになりました。この結果、注目すべき現象が新聞の発達の上に取りました。というのは、新聞が少数の知識階級のみを読まれていた時代は、政治や外交などの國政を主とした事件の報道とか、ことにそれに関する意見を中心とした社説・寄書等であったのが、読者の層が一般庶民階級にまで拡がった結果、新聞が取り扱う事件の範囲は、著しく拡大されるにいたりました。

即ち、國家・社会の各方面に起る日常の事件で、それが読者の最大多数に直接間接なんらかの利害關係があり、あるいは興味をひくものであれば、新聞はそうしたニュースの速報に全力を注ぐようになりました。こうして、一刻を争ってニュースを報道することが、アメリカ・イギリスをはじめ自由主義の國ではどこでも、新聞の不文律のようになっております。

こゝに一つ注目すべき重要なことは、前に述べたように、新聞は民間の事業として始められ、発達して来たものでありますが、その発達は「言論の自由」という土台ができたためというところであります。「言論の自由」は、イギリスでは早くも十七世紀の中ごろジョン・ロルトンが、フランス革命においてはミラボーが、唱導しはじめたもので、一口に言えば、人間はだれでも自分の信ずるところを公然と述べる権利があり、政府はこれに干渉したり、抑圧したりしてはならないということでありませす。この「言論の自由」は近代文明の一大基盤で、新聞の重要性も新聞がこの上に立つからであります。

さて、世界の新聞は、前に述べたようにニュースを速報しようとする点で、ほとんど同じであります。それなら、ニュースとはどういうものでありましようか。これに関して、無数の書物が書かれ、議論が出ていて、一定した定義はありませんが、大づかみにいえば、

一、実際に起つた事件で、日常平凡なことではなく、その発生が、時間的には新しく、地理的には近いこと。そうして、発表が時機に適していること。

二、できるだけ多くの読者に利害關係があり、興味を興え、かつ風教上に悪影響がないこと。これを具体的にいうと、根拠のない想像は、それがいかに珍奇なものでも、ニュースとしての価値はありません。また、毎日くり返される新しい事実、例えば太陽が東から昇り西に没するということは、人類にとりおそらく毎日の最も重要な事実であります。それは日常のことであるから、ニュースにはなりません。ねこがねずみをかみ殺したということも報道の価値はありませんが、その反対のことが起つたら、すばらしいニュースであります。

また、いかに現実に起つたこと、珍しいことでも、それがあまり古いことであつたり、遠隔の地の出来事であつたり、風教上に悪いことは価値がありません。鹿児島の人には、北海道の千戸の火事よりも、自分の近くの十軒の火事の方が大きなニュースです。昨年、南アフリカの山中で五本脚のさるが発見されたということよりも、きのう、丹波の山中で三本脚のさるを捕らえたという方が、日本の新聞の読者には二倍の興味があります。そうして、この興味のあるなし、あるいはその程度の大小を判断するには、そのニュースがどれだけ多くの読者により熱心に読まれるかを、判定することによつてきまるのであります。けさ、あるいはきのう起つたという政変・総選挙・國際會議の決定、殺人事件・大地震・水害等の記事などが、新聞により常に大きく扱われるのは、このためであります。

だいたいこういう標準のもとに、新聞のニュースは集められ、編集されるのでありますが、新聞の誇りとするのは、速報というところにありますので、そのためには大新聞社、ことに世界で新聞事業の最も発達しているアメリカの大新聞社では、あらゆる設備が用意され、また常に改善されつゝあります。分業と大量生産とは現代産業の一大特徴でありますが、大新聞社の組織はその代表的なものであります。ニュースを集めるためには、通信社があり、各新聞社には編集局があり、ここでは政治部・経済部・社会部・外報部（外国あるいは外交関係のニュースを扱う）。地方通信部（地方のニュースを扱う）。写真部等をはじめ、それ／＼幾つかの部門があつて、おの／＼専門的に材料を集めます。そうして集まつたニュースは編集部（整理部ともいう）で取捨選択し、見出しを付けて印刷部へまわし、そこでは直ちにこれを活字に組み、紙型にとり、現代高速度印刷の最高峰ともいうべき輪轉機にかけ、一時間十萬枚以上の速度で印刷します。そこから新聞が印刷されて出て来る光景は、文字通り急流の奔出するがごときものであります。

ニュースを原稿用紙に書き、写真を現像室に持ち運んでから、それが新聞に印刷されるまでは、急ぐ場合は二、三十分しか要しません。こうして敏活を期するためには、ニュースをとり、これを急送するために、大新聞社では、飛行機・傳書ばと・写真電送機等の設備を活用し、また、國內と國外とを問わず、重要な都市に社員を常置して、いわゆる通信網を張つて、ニュースは細大となく集めるようにくふうしています。そうして得たニュースは、電話や電信で刻々に本社に送られるので、本社には常に夜でも宿直員がいて絶えずこれを接受し、事実晝夜の別なく一年じゅう活動しているといつてもいいのは、新聞社であります。

ニュースとともに、というよりもそれ以上に新聞にとって重要なのは、新聞を作つて行く上の主義方針であり、それが社説となつて現われ、記事の取捨選択、見出しの大小を定める基準となります。新聞は世界の大多数の國では、民間の企業でありますが、普通一般の企業と異なり、公衆・社会・國家の利益のために活動する——即ち、社会の公器として立つのでなければ、眞によい新聞とはいへません。近代の諸國家の歴史を見ると、大國には必ず良心的な、りっぱな大新聞があります。

このほか、新聞につき知つておくべきことは、新聞社には編集局のつぎに、営業局があることでもあります。これはだいたい販賣部と廣告部とに分かれております。販賣部は新聞を賣り廣め、その代金を集めるのを仕事とします。廣告部は新聞へのせる廣告を集めるのが任務で、新聞がその用紙代とたいた相違のない安い値段で賣れるのは、この廣告による収入利益があるからであります。日本の多くの新聞では、販賣と廣告とによる収入利益はおの／＼半ばしています。外國、ことにアメリカなどでは、廣告収入が全収入の大部分を占めています。

健全な新聞は常に独立した言論報道の公器であります。その独立性を保つためには、他からなんらの援助にもあらずからないことが必要で、それには營業として能率を挙げることが必要なのであります。よい新聞はよく賣れ、よく賣れる新聞は多くの廣告を集め、この収益によつて施設を高め、改善して行けるので、この意味で世界の多くの新聞社にとり、編集と營業は車の両輪のような関係にあるといえます。

（鈴木文史朗の文による）

三 キューリー夫人

マリーは、そのみちづれを失い、世界は、ひとりの偉人を失った。雨とどろの中、このむごたらしい急死は、人々を驚かした。数欄にわたり、あらゆる國の新聞が、このドーフィヌ街の奇禍を、悲痛な物語として記載した。同情の書信がケレルマン通りに山と積まれ、中には、名もない人々にまじって、王や、大臣や、詩人や、学者の署名もあった。こうした手紙や、記事や、電報の幾つもの束の中には、眞実の情緒の叫びが見出された。

ケルゲン 卿^{キョウ}

キューリーシキヨノオソロシイツウチカナシミニタエズーツウシキイツアルワレラアスヌサミラボ
「ホテルツク」

ビエールキューリーの助手セーリシヌゾー

私どものうちのある者たちは、先生に眞実崇敬の念をさへげていました。私にとりましては、先生は、自分の親兄弟について、一番すきな人間のひとりでした。それほど先生は、そのつまらない協力者をも、大きくこまやかな愛情で包むことができたのです。そうして、先生の限りない親切は、名もない使用人にまでも及び、その人たちから、先生は崇拜されていました。先生が急になくなられたと

いう知らせを聞いて、実験室のボーイたちは泣きましたが、これほどすなおでいたましい涙を、私はまだかつて見たことがありません。

新聞記者たちは、墓の間に身をひそめて、不透明なヴェールにおゝわれたマリーの横顔を待ち伏せした。

……キューリー夫人は、その義父の腕によりかゝり、夫の棺のあとから、かこいの壁ぎわの、マロニエのかげに掘った墓までついでに行った。そこで、彼女は、いつまでも固くすわった同じ目つきで、しばらくじっとしていた。しかし束の花が墓のかたわらへ持って来られると、彼女は、急いでそれをひつつかみ、一つ／＼花をむしって、それを棺の上にまきはじめた。

彼女は、それをゆっくりと落ち着いてやった。そうして、深い印象を受けてなんの物音もさわめきも立てなかった会衆を、全然忘れてしまったように見えた。

そのうちに、葬儀主任が気がついて、列席のかた／＼の悔みをお受けしなければならぬということ、キューリー夫人に知らせた。すると彼女は、持っていた花束を地面に落とし、一語も言わずに墓を離れ、そうして、その義父のそばへ行った。(ジュルナル紙 一九〇六年四月二十二日)

文部省直轄教授團

パリ大学、理学部、実験主任、理学博士、ビエール・キューリー夫人、同学部、物理学の一講義を囑託せらる。

キューリー夫人は、右の資格において一九〇六年五月一日より、年額一万フランの給料を受くべし。

これこそ、フランスの高等教育のうちで、一婦人に職が與えられた最初のことである。

マリイは、自分が引き受けなければならぬ重い使命について、その義父がこまかくと話してくれるのを、うわの空で聞いていた。彼女は、たゞ一語、「やってみましょう。」とだけ答えた。

かつてビエールの吐いた一句、それは、道徳的遺言であり、一つの命令であったが、その一句が彼女の記憶にのぼって来て、判然と彼女にその行手を示した。

——どんなことが起ろうとも、たとえ、魂のなくなった抜けがら同然になろうとも、やっぱり研究を続けなければならない。

マリイの日記——

人が、わたしにあなたのあとを継げと言って來ている。わたしのビエール、あなたの講義と、あなたの実験所の指導とを、わたしは承諾した。それが、よいか悪いかをわたしは知らない。わたしがソルボンヌで講義をするようになるというんだがと、あなたはよくわたしに言った。それで、わたしは、

ひとつ努力して仕事を続けたいと思う。時には、そうする方が、わたしにとって、一番生きやすいようにも思われ、また時には、そんなことをするのが、氣遣いじみているようにも思われる。

一九〇六年五月七日

わたしのビエール、わたしは、どこまでもあなたのことを思う。わたしの頭はそのために鳴り、わたしの理性は乱れる。あなたを見ることもなく、二世を契つたみちづれの微笑もなくて、今後も生きなければならぬとは——わたしにはわからない。

二日前から、樹木は葉を持ち、庭は美しい。けさ、わたしは、その庭で子供らに見とれた。そうして、あなたがかれらを見たならば、さぞ美しいと思つたことだろう。そうして、花の咲いたきょうちくとうとすいせんを見せてくれるために、わたしを呼んだことだろうと、そんなふうに思つてみた。きのう墓地で、ふと、わたしは、石に刻んである「ビエール・キューリー」という語がわからなくなつてしまった。郊外の美しさが苦しくなり、わたしは、またヴェールを引きおろして、それを通してすべてのものを見ることにした。

五月十四日

わたしのビエール、えにしだの花が咲き、ふじや、さんざしや、しょうぶが咲きはじめていることを、わたしはあなたに言つてあげたい——たしか、みんなあなたのすきな花だった。

わたしは、また、あなたの講座にわたしが任命されたこと、そうして、それをわたしに祝つてくれ

たまぬけもあることを、あなたに言いたい。

わたしは、もはや、太陽も花も好まないということ、あなたに言いたい。そういうものを見るとわたしの心は痛む。あなたが死んだ目のような暗い天気の方が、わたしには感じがいい。そうして、わたしが、よい天気を憎むところまで行かなかったのは、わたしの子供たちに、それが必要だからです。

五月二十二日

わたしは、一日じゅう実験所で働く。わたしにできることはそれだけだ。どこにいるよりも、わたしはそこにいる方がよい。わたしには、もはや、おそらく学問の研究を除き、一身上の喜びを興えてくれそうなものは、何一つ考えられない——しかも、それすら、いなというのは、たとえ、わたしが成功するとしても、それをあなたが知らないでいるということに、わたしはたえられそうもないからです。

彼女は、断然はらをすえて、その夏じゅう実験所で勉強し、そうして、十一月に始めるはずの授業の準備をするため、バリたとびまることにきめた。ソルボンヌでの彼女の講義は、ビエールルキューリーのそれに負けないだけのものではなければならない。マリイは、かれの手帳や書物を取り集め、かれのこしたノート調べた。もう一度、彼女は研究に没頭する。

この陰気な休暇じゅう、彼女の娘たちは、田舎ではねまわった。エーヴは、サンレミレシユヴルーズなるその祖父のもとで、イレエヌは、マリイの次姉ヘラシヤライと海岸で。ヘラシヤライは、マリイの手を助けようというやさしい心根から、フランスでこの夏を過ごそうと、やって来たいたのである。

秋になって、マリイは、ケレルマン通りにずっといることにたえられなくなり、新しい住所をさがし求めた。彼女は、ソイに身を落ち着けたと思う。ビエールが彼女に会った時住んでいた所であり、——かれが安らかにいこっている所である。

有名な学者の未亡人、その夫がソルボンヌで担当していた講座に正式任命されたキューリー夫人は、一九〇六年十一月五日、月曜日、午後一時半から、その第一回めの講義をする。

キューリー夫人は、この開講講義では、ガス中のイオンの説を述べ、そうして、放射能の解説をする。

キューリー夫人は、「階段講堂」で講義をする。

ところが、階段講堂は、およそ百二十人分の座席を擁し、その大部分は学生に占領される。一般の聴講者や新聞雑誌記者は、それ故、やはり多少の権利は持っているのだが、せい／＼二十人分ぐらいの座席を割り当てられることになる。今度の事情は、ソルボンヌの歴史にあつても独得な事情なのだから、この最初の講義だけは、なんとか規則を曲げて、キューリー夫人に、大講堂を使わせる

まうにするわけには行かないものだろうか。

右のような当時の新聞からの抜き書きは、この「有名な未亡人」がはじめて公衆の面前に現われるのを、パリが、どんなに興味深くしびれを切らして待ちもうけていたかを、如実に語っている。理科大学の事務所に押しかけて、招待券がもらえないのを憤慨する新聞記者や、社交界の人々や、きれいな婦人や、藝術家などは、たゞ同情からだけで動いているのではなく、学問をしたいのでもない。かれらには、「ガス中のイオンの説」などはどうでもよいのであり、この残酷な日のマリイの苦惱も、かれらの好奇心にとっては、とうがらしの分量をふやしたものに過ぎない。苦痛にまで俗人たちが付きまとう。

創設以來はじめて、一婦人がソルボンヌで話をするのだ、同時に天才であり絶望の妻である一婦人が。これこそ、「初日」の聴衆を、晴れの日のお客を、ひきつけるだけのものはある。

正午、マリイが、ソイの墓地の霊前に立って、きょう自分がその後を継ぐ当の相手に、低い声で話しかけていた時刻には、すでに、聴衆が、小さな階段講堂につめかけ、理科大学の廊下をふさぎ、そうして、ソルボンヌの廣場にまであふれていた。講堂には、無知なやからとえらい人たちが、また、マリイの親友たちと、なんでもない者らとが、入りまじっていた。一番歩の悪いのは、ほんとうの学生たちであって、講義を聴き、ノートをとるためにやって来たかれらは、人に場所を取られないように、自分たちの腰掛にしがみついているなければならない。

一時二十五分。会話のざわめきが堂にみなざる。さしやき、たずねあい、キューリー夫人の入場を、

何一つ見のがし聞きのがすまいと、首を伸ばす。そこにいる人たちは、みな同じ思いだった。今度の教授、ソルボンヌが古來その教師として認容したたゞひとりの婦人の口をついて出る最初のことばはどんなだろうか。彼女は大臣に礼を言い、大学に礼を言うだろうか。ビエール・キューリーのことを話すだろうか。もちろん、そうだろう。慣例では、前任者への賛辞を述べることになっている。しかし、こゝでは、前任者は夫であり、共同研究者である。とてもやりにくい立場だ。どきどきする、一世一代の瞬間……。

一時半。奥の入口が開き、かっさいの突風のうちに、キューリー夫人が講壇にのぼった。彼女は頭をさげる。それはうるおいのない運動であるが、それでもあいさつのつもりである。立って、その手は、器具でいっばいの長いテーブルをしゃつかとつかみ、マリイは歓迎のあらしのやむのを待っていた。たちまちにして音がやんだ。彼女は、ちょっとあらたまった顔になる。と、このあおざめた婦人の前で、何かしらある情緒が、見物のために來ている群衆をしんとだまらせた。

マリイはまっすぐ自分の前をながめ、そうして言った。

「約十年このかた、物理学の方で達成されました進歩を考えてみます時、人は、電気及び物質に関してわれわれの思想のうちにひき起された動きに、驚嘆させられます……。」

キューリー夫人は、ビエール・キューリーがそここのところでやめたたちょうどその文句で、自分の講義を始めたのである。

一物理学の方で達成されました進歩を考えてみます時……という、この氷のようなことばのうちにどんなに多くの悲痛なものが含まれていることだろう。涙が目にわき、ほおを傳わった。

終始変わらぬなだらかな、ほとんど單調な声で、この女科学者は、その日の課業をしまいまでやってのけた。彼女は、電氣の構造や、原子の崩壊、また放射性物質に関する新しい学説の話をした。無味乾燥な敘述をくじけずにやりお、せて、彼女は、はいつて來た時と同じくらい足ばやに、小さな入口から引っこんで行つた。

(エーヴリッキューリー原作―川口篤・河盛好藏・杉捷夫・本田喜代治の共訳による)

四 花より雨に

静かな山の手の古庭に、春の花は、支那の詩人が春風二十四番と数えたように、うめ、れんぎょう、も、もくれん、ふじ、やまぶき、ぼたん、しゃくやくと順々に咲いては散つて行つた。

明かるい日の光の中に燃えては消えて行くさま、な色彩の変轉は、黙つてさびしくうちながめる自分の胸に、悲しい物語のさわめて美しい一章一章を読み行くような軟らかい悲哀を傳える。

「われの悲しむは過ぎ行くことしの春のためではない、また來べき翌年の春のため。」とうたつたのはたれであったか忘れてしまつたが、「春はわが身にとつて異なる秋にひとしい。」と言つたのは南國の人の常としてことさらに秋を好むジャン・モレアスである。

空は日ごとに青く澄んで、よく花見帰りの午後から突然暴風になるような氣候の激変は全くなくなつた。日の光は次第に強くなつて、赤みの多いゆず色の夕日は、もうたそがれも過ぎ去るころかと思ふ時分まで、案外長くいつまでも、高いかしのこずえの半面や、または低く突き出たかえでの枝先など

に残っている。あるいは、どこからさしこんで來るものとも知れず、植えこみの奥深い土の上に、ばらばらなはん点を描いていることもあつた。かゝる夕方に空を仰ぐと、冬には決して見られないうすねずみ色のうろこ雲が、名残りの夕日に染められたまゝ、動かさず空一面に浮いていて、草の葉をもそよがせないほどの軽い風が、食後に散歩する人を、いつか星のさそめるころまで、遠く郊外の方へと連れて行く。

いずこを見ても若葉の緑は洪水のようになまざりあふれて、日の光に照らされる緑の色の強さは、しめた座敷の障子にまで反映するほどである。どんより曇つた日には、緑の色はかえてあざやかに澄みわたつて、沈思に疲れた人の神経には、軟らかい木の葉の緑の色からは、一種言いがたい、やさしい音響が発するような心持をさせることさえあつた。

わが家の古庭は非常に暗く狭くなつた。

しげつた木立はその枝をお、う木の葉の重さにたえぬような、苦しげな悩ましげな様子を見せるばかりか、圧迫の苦惱は目に見えぬ空氣のうちにみなぎりはじめ。西からとも東からともほとんど方向の定まらぬ風が、突然吹きおりて突然消えると、こんもりした暗い樹木は、へびのうろこを動かすような氣味悪い波動を、うつ向いた木の葉のしげりからしげりへと傳える。おり／＼雨が降つて來ても、庭の地面は冬のように、すぐさまぬれはせぬ。ぬれるとかえて土地の熱氣を吐き出すように、一帯の氣候をいやに蒸し暑くさせる。伸びきつた若葉のどがった葉末から滴りもせずにとまつている雨のしずくが、曇りながらもどこかしらばつと明かるい空の光で、宝石のようにうるわしく輝く。石

に蒸す青ごけにも木の根もとの雑草にも小さな花が咲いて、植えこみのかげには雨をよける蚊の群れが、雨の糸と同じようにこまかく動く。

雲が流れて強い日光が照りはじめるとすぐにいちごが熟した。びわの実が次第に色づいて、いちじくの葉裏には、もうはとの卵ほどの実がなっていた。日当たりの悪い木立の奥に、青白いあじさいが氣味悪く咲きかけるばかりで、もはや庭じゅういずこを見ても、花というものは一つもない。青かった木の葉の今は恐ろしく黒ずんで来たのが不快に見えてならぬ。古庭はますます暗くなって行くばかりである。

ある日の夕方、近所の子供が裏庭のかきねをこわして、長い竹ざおでうめの実をたき落して逃げて行った。別に不消化なものをたべたというでもないのに、突然夜なかに腹痛を覚え、自分はふいと目を覚ましたことがある。その時戸外にはよほど前から雨が降っていたと見えて、点滴のひびきのみか、夜風が屋根の上にと、こずえから拂い落すまばらなすくすくの音をも耳はした。梅雨はこんなふうについて降り出したともなく降り出して、いつやむとも知らず引き続く……

家じゅうの障子をこたくくあけ放し、空の青さと木の葉の緑をながめながら、午後の暑さに草いちごやさくらの実をむさぼったころには、風に動く木の葉の乾いたひびきだが、ことさらに晴れた夏という快い感じを起させたが、今降り続く雨の日は、深夜のごとくしずまり返って、木の葉一枚動かさず、ふだんは朝から聞えるさまざまなまちの物音、物賣りの声も全くとだえている。午前の十時ごろか、ちようど夕方のようにうす暗い時、いつもは他の物音にさえぎられて聞えない遠い寺の時の鐘が、音波

の進みを目に見せるようにひびいて来る。すると、この寺の鐘は冬の午後によく聞きなれたひびきなので、自分の胸には冬に感ずる冬の悲しみが時ならず呼び起され、世の中には歡樂も色彩も何も無いような氣がして、取り返しつかない後悔が倦怠の世界にひとりで跋扈するのである。

筆の軸はこち悪くねばって、詩集の表紙はかびてしまった。壁と押入から濕氣のにおいがわき出し、手箱の底に秘藏した昔の手紙を虫が食う。なめくじのはう縁側に、悲しいさびしいひびきの声が聞える暮れ方近く、へやの障子は濕つて寒いので一枚もあけたくはないけれど、あまりのうす暗さにたえかね、縁先に出てたしずんでみると、雨の糸は高い空から庭じゅうの樹木をくもの巢のように根氣よく包んでいる。音もひびきも何もない陰氣ないやな雨である。

ちまたに雨の降ることく、
わが心にも雨を降る。

とヴェルレーヌがうたったような音楽的な雨ではない。この詩はひびきのつよい秋のしぐれを思わせるが、これに反して、現代に最も悲しい詩人といわれたベルギーのローダンバックが、
滅びしもの声なき涙のごとく、

死せし人のとざされし日より落つる涙のごとく、
と、色も音もないかの國の冬の雨をうたったことばが、今最も適切に自分の記憶に呼び返された。
人の心は旗をよりぬれてさがりし、
その旗の色とてもなき襤褸なりけり。

とうたわれたように、動きもせぬ、ひらめきもせぬ。人の心はたゞくさって行くばかりである。

しかし、それら近世の詩人にとっては、悲愁苦惱はしばしば何物にもかえがたい一種の快感をもたらすことがある。自分は梅雨の時節において、他の時節に見られない特別な恍惚を見出だす。ある夜非常におそく、自分は重たいからかさを肩にして、まっくらな山の手の横町を帰って来た時、捨てられたいぬの子のあわれに鼻を鳴らして人のうしろについて来るのを見たが、多分そのいぬであろう、自分はうちへはいつて寢床についてからも、夜じゅう遠くの方で鳴いてはやみ、やんではまた鳴く小さいぬの声を、これも夜じゅう絶えては続くあまだれの音の中に聞いた……。

雨はおり／＼降りやむ。すると空は無論すきまなく曇りきつていながら、日が照るのかと思うほどに明かるくなって、庭じゅうの樹木は、しげりの軽重にしたがって陰影の濃淡をあざやかにし、すべての物の色がたそがれの時のように浮き立って来るので、感じやすい心は、すぐさま秋のたそがれにわれ知らずふけるような果てしのない夢想に引き入れられる。うす曇りの空の光に、日ごろは黒い緑の木ノ葉が一帶に秋のごとくうすく黄ばんでしまつて、庭のかなたこなたに池のようにたまつた雨水の面はまぶしいばかり澄みわたり、もうだいたい紫の色もこくなつたあじさいの反映しているのがいかにも美しい。少しの風もないのになめのいけがきからは、赤くなつた去年の古葉が雨のしずくとともにしきりと落ちる。

すゞめの声がにわかにかしましく聞え出す。するとこれが雨の晴れ間に生きかえる生活の音楽のブリューードで、この季節に新しく聞く苗賣りの長く節をつけて歌う声。続いてロシアのバン賣りの賣り声をめざらしそうにまねする子供の叫びが、こなたからこなたへと移つて行くので、バン賣りにしきりと落ちる。

は横町を遠くへと曲がって行ったことがよくわかる。冬にも春にも日ごろいつでも聞くまちの声は一時に遠く聞え出したが、ほどもなく、再び耳もと近くブリキのといに屋根から傳わつて落ちるあまだれれのひびきが起る。自分ははじめ、目には見えないぬか雨の、空の晴れそうに明かるくなつていながらもかゝわらず、いつのまにかまた降り出していたのに心づくのであつた。

びわの実は熟しきつて地に落ちてくさつた。かわやに行く縁先になんてんの木がある。その花はいかなる暗い雨の日にも、雪のように白く咲いて房のようにさがっている。自分は小さい時この花の散りつくすまで雨は決して晴れないと語つたうばの話の思い出した……。

(永井荷風の文による)

五 山のあなた

春の朝

時は春、

日は朝、

朝は七時、

片岡に露みちて、

あげひばりなのりさや、

かたつむり枝にはひ、

五 山のあなた

神、そらにしるしめす。
すべて世は事もなし。

(フラウニング原作—上田敏の訳による)

落葉

秋の日の
ヴィオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うらがなし。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
なみだぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかして
さだめなく
とび散らふ
落ち葉かな。

(ヴェルレーヌ原作—上田敏の訳による)

山のあなた

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
あゝ、われひとと尋めゆきて、
なみださしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

(ブッセ原作—上田敏の訳による)

六 小人國

私たちは南洋から東インドへ行く途中、暴風のため、ヴァンディーマンの國の北西の方へ流された。観測によつて南緯三十度二分の所に來てることがわかつた。船員のうち十二人は過度の労働と悪食のために死に、その他の者もひどく衰弱していた。十一月の五日という時、その辺では夏のはじめで、もやが深かつたが、水夫たちは船から五十ひろとない所に一つの岩礁を見つけた。しかし風が強かつたので、いきなり吹きつけられ、船はたちまちさけてしまつた。私を加えて船員六人、ボートをおろして、本船と岩礁から離れた。私たちは、推測すると、約九マイルほどこいだが、なにしろ本船にいた時すでに働き疲れていたので、もはやこげなくなつてしまつた。で、波のまに／＼うちまかせていたが、約半時間もすると、ボートは北から吹いて來たはやてでひっくりかえつた。

ボートにいたなかまはどうなつたか、岩礁の上へ逃げていた者はどうなつたか、また本船に残つていた者はどうなつたか、知るよしもないが、いずれはみんな死んだことだろう。私はどうしたかという時、運にまかせて泳ぎ、風と潮に流された。時々足をつけてみても、底へは届かなかつた。しかし、もうほとんどだめになり、どうすることもできなくなつた時、やっとせいの立つ所へ來ていた。その時は、あらしもずっと弱まつていた。底の勾配が緩かつたので、約一マイルも歩いて、やっと陸にあがつた。もう夜の八時ごろかと思われた。それから半マイルほど向こうへ行つてみたが、家らしいものも人らしいものも見つからなかつた。少なくとも、そんなものは目につかないほど私は弱りきつ

ていた。なにしろ疲れていたので、その疲れと、暑さと、本船を離れる時に飲んだ一合五勺ほどのブランドイーのせい、ひどく眠くなつて來た。草の上に寝ころぶと、ばかに短くて柔らかい草で、生まれて覚えのないほどぐっすりよく眠つた。勘定してみると、九時間ぐらい眠つたわけである。というのは、目が覚めるとちょうど夜が明け放れていたので。

起きようとしたが、動けなかつた。というのは、あお向けになつたまゝ、両手と両足を右も左も大地にきつくつなぎとめられてあつたし、またふか／＼と長く伸びた髪の毛も、同じように結わえとめられてあつたので。それからまたわきの下からも、へかけて、幾筋もの細ひもが胴体にかゝつてゐるのをも感じた。上を向いたきりではあるし、太陽は暑くなつて來るし、光が目をも痛めた。あたりに騒がしい声が聞えるけれども、そんな姿勢だから、空よりほかには、なんにも見えなかつた。

しばらくすると何か生きてゐるものが左足の上で動いてゐるのを感じた。靜かに胸の上を通り、あごの近くまで來た。で、できるだけ伏し目をつかつて見ると、身のたけ六インチにも足りない人間で、手に弓と矢を持ち、背中に矢筒を背負つてゐるのがわかつた。すると、今度は（推測では）少なくとも四十人の同じような人間がそのあとからついて來るのを感じた。私は非常に驚いて大きな声を立てると、みなあわてて逃げ出した。なかには、あとで聞いたのだが、私のわき腹から地面へ飛びおり、ころんでけがをした者もあつた。しかし、すぐ引返して來て、その中のひとり、私の顔のよく見える所まで來ると、感嘆したように両手と目をあげ、鋭いはっきりした声で、ヘキナーデガルと叫んだ。ほかの者も同じことを幾度かくり返した。しかし、その時はなんのことだかわからなかつた。私はその間じゅう、読者も察してくれるだろうが、非常な不安で寝てゐた。ついに逃げ出してやろうとも

がくと、運よくひもが切れ、左腕を地面にしぼりつけてあったくいがぬけた。その腕を顔のところまで持って来てみて、しぼり方がわかったので、同時に、はげしく引っぱると、今度は髪の毛を左の方で結わえとめてあったひもが少し緩んだ。それで顔を二インチばかり振り向けることができた。しかし、やつらはまたもや逃げ出して、つかまらなかつた。その時、非常に鋭いアクセントで大きな叫び声がして、それがやむと、その中のひとり、トルゴフオナクと高く叫ぶのが聞えた。すると、百本以上の矢が左の手先に、同じ数の針がさしたようにあたったのを感じた。それから今度は空に発射すると、その多くは私のからだの上に落ち（感じはしなかつたが）、また顔の上に落ちたのもあった。もっとも、顔はすぐ左手でおさったけれども、その矢の雨がやむと、私は悲しさと痛さでうめき出した。そうして、また逃げ出そうとすると、第二の一せい放射を前よりもひどく受けた。なかには、やりでわき腹を突いたやつもあった。しかし運よく私は革のうわを着ていたので通らなかつた。これはじつとしてるのが一番りこうだと思つた。なんでも夜までそうやっていけば、左手はすでに解けているのだから、容易に逃げられると思つた。また住民どもについていうならば、たとい、どれほどの大軍で押し寄せても、今見たくらいの大きさの人間どもなら、十分に對抗しえられると思われた。しかし、運は思うようには向いて來なかつた。

人々は私がじつとしているのを見ると、もう矢は放たなかつた。しかし耳にはいる音によって人数のふえたことがわかつた。そうして、私の所から四ヤードほどの、ちょうど右の耳の向こうあたりで、大勢が働いているような物をたたく音が、一時間以上もしてゐた。それで、くいとひもの許すだけそつちへ首を振り向けて見ると、地面から一フィート半ほどの高さに演壇が作られ、この國の人間が四

人ほどあがれるようになって、はしごが二つ三つかゝつてゐた。その壇上から、その中で一番をうらうに見えるのが、私に向かつて長いこと何か演説したけれども、一言もわからなかつた。しかし、言ひ落してはならないが、そのえらそうな男は、演説を始める前に三度ラングロデフルサンと叫んだ。（そのことばも前のことばも、あとでくり返されて、説明された。）すると、たちまち五十人ほどやつて来て、頭の左側を結わえつけてあったひもを切つた。それで自由に顔を右に向け、演説する男のふうさいや身振りを観察することができた。年のころは中年で、そばについているほかの三人より一段とせいが高く、三人の中のひとりは小姓で、すそをさげているのが、私の中指よりいくらか大きいくらいだつた。あとのふたりは両側にひとりずつ立って、かれに付き添つてゐた。かれは雄弁家のあらゆる技法をつくした。おどすような調子があつたり、また約束するようなあわれむような親切なような調子があつたりした。私はことばづくりに答え、最も従順な態度で、左の手と両方の目を太陽の方へあげ、太陽を証人に立てるやうにして答えた。そうして、本船を離れる何時間も前からなんにも口にしていず、ほとんど餓死しやうになつていたので、自然の欲求に迫られ（やかましい禮儀作法にはそむくことになるだろうが）、がまんがでなくなつて、何か食いたいということを示すために指を何度も口のところへ持つて行つて見せた。するとブルゴ（あとでわかつたのだが、高官のことをさう呼ぶ。）は私の意味することを非常によく理解した。かれは演壇からおりて、私のわき腹にはしごを幾つもかけると命じた。その上を百人以上の人間が登つて来て、はじめに私のことが報告されるとすぐ國王の命令によって用意されて運ばれてあつた肉のかごをかついで、私の口のところまで歩いて來た。見るといろいろな動物の肉があつたが、味わい分けることはできなかつた。肩の肉も、脚の肉も、

腰の肉もあり、羊肉の形に似てよく料理されており、大きさはひばりのつばさよりも小さかった。私は二きれ三きれずつ一口に食い、鉄砲のたまの大きさほどのパンを一度に三つずつ食った。かれらはできるだけ早く供給しては、私の大きさと食欲に驚嘆していた。

私はその次に何か飲みたいと、もう一度、手まねをした。かれらは私の食いぶりによって、少しぐらいの分量ではまに合わないことを知っていた。それに、非常にわかりのよい人間たちだったので、一番大きいたるを巧みにつるしあげ、私の手もとへころがして来て、鏡を打ち抜いた。私はそれを一息に飲んだ。一合五勺ほどとはいっていないので、わけもないことだった。味はバーガンディーの軽いぶどう酒のようで、それよりもずっと風味がよかった。二つめのたるが来た。それをも同じようにして飲み、もっと飲みたいと手まねをして見せたが、もうなかった。

私がそういった不思議なことをやっていると、かれらは歓声をあげ、私の胸の上ではねまわりながら、はじめのようにへキナーデガルを何度もくり返した。かれらは手まねで、二つのたるを投げ落せと私に合図をした。しかし、まず下にいる人たちに、ボラクレーメヴォラーとどなって、わきへのくように警戒しておき、それからたるが空高く投げ出されるのを見ると、一同口をそろえてへキナーデガルを叫んだ。

白状すると、私は、かれらが私のからだの上を行ったり来たりしている時、手ぢかなやつを四、五十人つかんで地べたへたゝきつけてやろうかと何度も思ったのだが、また考えてみると、かれらにされたことが、そんなにひどいことであつたというわけでもあるまいし、私としてもかれらに名譽にかけての約束をしているし（私の服従的態度を自分でそう解釈したので）、そう思うと悪念はたちまち去

つてしまった。その上、接待のおきてにより、これほどの費用と儀礼をもって取り扱ってくれる者どもには、負うところがあるようにも考えられた。それにしても思ひめぐらすと、こんなちつぽけな人間どもが大胆不敵にも私の五体の上に登って歩きまわり、しかも私の片手は自由がきくの、かれらからすればこんなにとえらい大きな生き物ともいへべき私を見ても、ふるえあがるような氣色のないのが不思議でならなかった。

しばらくして、もう私が肉をほしがらないのを見て取ると、私の前には皇帝陛下から遣わされたひとりの高貴の人が現われた。その貴人は十二人ほどの家來を従え、私の右足の小指を登って、顔のところまで進み寄り、玉璽のすわった國書を取り出し、それを私の目の前にさしつけ、約十分間少しも怒つたような様子もない、むしろ一種の斷乎たる決心をもつて、時々向こうの方を指さして話した。それはあとでわかつたのだが、約半マイル離れた首府をさしたので、そこへ私は連れて行かれることに會議が一決し、陛下の同意を得たのであつた。私はことばすくなに答えたが、わかるはずもないので、らくになつてゐる方の片手を今一つの手の方へ（貴人の頭越しに、たゞし貴人にも従者にもけがをさせないように氣をつけて）持つて行き、次に私の頭とからだの方へ持つて行き、自由にしてほしいという意味を示した。貴人にはその意味がよくわかつたようだった。というのは不承知のしるしにかぶりを振り、手まねで私を捕虜として引いて行くことをして見せた。しかし、また別の手つきで、肉や飲み物はいくらでも取らせる、待遇は十分よくしてやることを示した。それで、私はまたもや綱を切つてやろうかと考えた。けれども、さっきの矢がまだ顔や手に刺さつて、みゝずばれになつて痛んでおり、投げやりもまだ刺さつたまゝであり、敵の人数もふえていることを感じた

ので、どうにでも言いなりになろうと手まねで知らせた。それを見ると、ブルゴーと従者はいんぎんに喜びの色をなして引き取った。

まもなく歓呼の声があがって、ペプロム・セラムということばが幾度もくり返されるのが聞えた。気がつくとも、非常にたくさんな人数の者が私の左側で綱を緩めていた。それから、かれらは私の顔と両手を非常によいにおいのする軟膏（たじこ）みたいなもので塗ったので、数分間たつと、矢の痛みはずつかり去ってしまった。そういったわけで、それに加えて、さっきのたべ物と飲み物に栄養づけられて元気づき、私は眠らされてしまった。あとでわかったのだが、約八時間眠った。それも不思議はないことで、医者たちは皇帝の指図により、眠り薬を酒だるの中へまぜておいたのだった。

はじめ私が上陸して大地に寝ころんでいるのを発見された時、皇帝は急使によっていちはやく知ると、御前会議を開いて、前に述べたような状態に私をしばらくつけ（それは私の眠っているうち、夜の間に行われ）、肉と飲み物をたくさん送り届け、私を首府へ運ぶべき機械の用意をするように決議したものでらしい。この決定は、あるいははなはだ大胆に危険に見えるかも知れない。また同じような場合としても、ヨーロッパの君主からならば、だれからも断然そんなまねはしてもらいたくない。けれども、私の見たところでは、それは非常に慎重でもあり、かつまた寛大でもあった。というのは、この人たちが私の眠っている間に、やりや矢で私を殺そうとしたと仮定してみると、私はきつと最初の痛さで目を覚まし、そのはずみに、おこつて力まかせにあればたら、しばつてあつた綱を引つ切つたに違いない。そうなつたら、かれらは抵抗することはできないのだから、もういかなるあわれみをも期待することはできなかつたはずである。

この國の人たちは非常に数学にすぐれており、学問の保護者として知られている皇帝の奨励によって、機械学のごときにおいては大いなる完成に達している。この君主は樹木その他の重い物の運搬のために、車輪のついた機械を幾つも持っている。木材のできる森の中で、しばしば長さ九フィートもある最大の軍艦を造り、それをそういつた車台にのせて、海まで三、四百ヤードも運ばせたことがある。それで五百人の大工と機械工がすぐ仕事にかかり、これまでにない大きな車台をこしらえた。地面から三インチあがつた木のわくで、長さ約七フィート、幅四フィート、二十二の車輪で動くことになつていた。私の耳にした喚声はこの車台の到着した時のことで、それは私が上陸して四時間たつと動き出したものらしかつた。それが私の寝ている横手に平行に持ちこまれた。しかし何よりやつかいなことは、私のからだを持ちあげて、その車の中に入れることだつた。そのために高さ一フィートの棒が八十本立てられ、からげ糸の太さの、非常にしょうぶな綱（ほぐたい）がたくさん縛帯（ばくたい）にかぎで掛けられた。その縛帯は人夫たちが私の首・両手・胸・両足のまわりにまきつけてあつたのだ。九百人の最も強壯な男たちが働いて、棒に取りつけてある滑車でその綱を引っぱり、三時間足らずで私のからだはつりあげられて、車台の中へ落されると、そこにしつかりとくくりつけられた。これはみな聞いた話である。というのは、その作業の行われている間、私は酒にまぜられた睡眠剤がまわつて深い眠りに落ちていたのだから。皇帝の最大の馬が五百頭、いずれも、たけ四インチ半ほどのが使われて、私を首府の方へ引いて行つた。首府は前に言つたように半マイル離れていた。

出かけてから四時間ほどたつと、私ははなはだこつけないことで目を覚ました。というのは、車に何か故障があつてそれをなおすためにちよつととまると、二、三人の若い者が私の寝顔を見たい好奇心

から、車台へよじ登り、そつと私の顔のところまで進んで来たが、その中のひとりの衛兵の士官が、手やりのきつさきを私の左の鼻の穴へかなり深くさしこんだ。わらしへのようにくすぐったかったので、私はひどくくしゃみをした。するとやつらは見つからないように逃げ出したが、三週間たつてから、私はその時急に目を覚ましたわけを知つたのである。私たちはその日は終日長い道中を続け、日が暮れてとまると、両側には五百人ずつの衛兵が、半数はたいまつを持ち、半数は弓矢を持ち、もし私が動こうとしたら射ようと身構えしていた。次の朝は、日の出に道中を続け、ひるごろ、町の門から二百ヤードとない所に着いた。皇帝も宮廷の人たちもみな私たちを出迎えた。しかし大官たちは決して皇帝が危険をおかして、私のからだに登つたりしないようにした。

車のとまつた所には、全國第一といわれる古い大寺があつた。それは数年前、あるいまわしい殺人事件で汚されたので、この國の人たちの氣持から不淨と認められ、それで雜用に使われることになり、莊嚴も装具も運び去られた。その建物の中に私は寝起きすることにきまつていた。北向きの大門は高さ約四フィート、幅二フィートばかりで、私には容易にくぐれた。門の両側には、地面から六インチとない所に小窓が一つずつ附いていて、その左側の小窓の中へ、王家のかじ屋が九十一錠の鎖を通した。ヨーロッパの婦人持ちの時計の鎖に似て、大きさもほとんど同じくらいで、それが私の左足に三十六箇の錠前であめられた。

この寺と向かいあつて、大通りの向こう側二十フィートの所に、高さ少なくとも五フィートの一つの塔があつた。そこへ皇帝は宮廷の重臣たちを連れて、私を見物するために登つたということだ。もつとも、私の目にはつかかなかつたけれども。うわさによると、十万人以上の住民が同じ用向きで町から出て来たそうだ。そうして、私には衛兵がついていたにもかゝらず、前後数回にわたり、私のからだに、はしごをかけて登つたやつが、一人をくだらなかつたと思う。しかし、すぐに布告が発せられ、死刑をもつてそれを禁止することになった。人夫たちは私が抜け出すことはできないと見ると、私をしばつてあつたすべての綱を切つた。で、やつと立ちあがつたが、これまでに覚えのないゆううつな氣持だつた。しかし、私が立ちあがつて歩くのを見た時の人々の騒ぎと驚きは、ことばにつくせない。左足をつないである鎖は長さ二ヤードほどあつたので、自由に半円形に歩きまわれるばかりでなく、結わえつけられてあるのが門の四インチほど内側だつたので、寺の中へはいこんでながくと寝そべることもできた。

(スウィフト原作―野上豊一郎の訳による)

七 身振り語と言語

一言語とは

ことば即ち言語は、本來人間がその心を音声に表わしたものが、くり返しくり返されてその音声の形が定まり、それがお互の間の心を傳える一種の符号となつたものです。たゞし、音声のほかは、なお、心を表わす方法があります。その一つは形象をもつて表わす方法で、形象の表現力を美的に発達させたものが絵画・彫刻となり、知的に発達させたものは文字となつて言語表現の大事な補助をなしています。

次には、目つき・顔つき・手まね・足まねの類、一口に言えば身振りのしかたがあります。今なお人類は、話しながら顔をやわらげたり、緊張させたり、手を振ったり、こぶしを握ったりして言語表現を助けています。しかし、これを單に助けとして用いるにとどまらず、もっぱらこればかりを続けて相当の長さの会話が交換されたら、こゝに、言語と同等な効力を持つ身振り語が生まれます。

身振り語は、現に、音声の恵みを受けない不幸な人々の間に行われているのみならず、未開種族の間にも行われていることが報ぜられています。オーストラリア土人がその一例であつて、人類学の本などに、よく見うけることであります。狩からもどる夫を、妻が戸口へ迎えて遠くから、獲物があつたかと身振り語で問うのに、夫も身振り語で、「きょうはだめ、たつた三羽だけだ。」などというほどの会話なら、今なお、しばしば行われているようです。またアメリカインディアンも有名です。部落の間に、方言の差があまり大きく、ことばが通じにくくなつてゐるところから、身振り語が自然に発生して行われているということです。

さてこの身振り語を、われ／＼の言語と比較してみることは、われ／＼の言語の特色をはつきり理解する助けとなります。

二 音声と身振り

まず、音声と身振りとを比較対照してみますと、互にその間に長短がありますが、音声は、耳に訴える方法であつて、見えないから、概して意味が抽象的になつてわかりにくいものですが、身振りの方は、目に訴える方法で、具体的で、意味がわかりやすいものです。このことは簡単に実験できます。

即ち、何かある物を、音声と身振りとをもつて表わして比べてみる——例えば、鼻なら鼻ということをも、もし新規に創意をもつて表わすのに、音声ではなんと発音したら、相手が「鼻だな。」とわかつてくれましようか。すでにできあがつてゐる「はな」という語を用いるなら、すぐわかつてもらえますが、すでにできあがつてゐる語を用いずに、自分であらたにくふうして、鼻とわかつてもらえような発音をするということは、いかなる知恵者といえども考えつくことができません。しかし身振りをもつて表わすならば、きわめて容易にできることです。即ち、手をもつて鼻をつかんで示せばよい。もしくは指で鼻をさして示せばよい。「指さす」ということは、「つかむ」動作の弱まった形で、同義であります。「あ、鼻だな。」とすぐ相手にわかります。同様に「頭」なら、頭を指さして示す。「脚」なら脚を指さして示す。「机」なら机を指さし、「いす」ならいすを指さす。こうして何物でも、たゞ指さすだけで簡単に表わし示されます。

「見る」「聞く」「考える」などというはたらきを表わそうとするにも、音声では表わしようがないのに、身振りでは、はなはだ簡単にできます。見るまねをして見せる。例えば、じいっと前方へ目を注いで見せる。「聞く」なら、耳をそばだてて聞くまねをして見せる。あるいは、手をかざして耳へ添えなごして見せてもよろしい。「考える」なら、考える時のまねをして見せる。例えば、腕を胸もとに組んで、首を右へ左へ、交互にかしげて見せる。それだけで、「あ、考えているな。」と相手にもわかります。

身振りというものの、かようにその意味があらわであつてわかりよいわけは、もと／＼人間の本能的な表出運動そのものに基づくからです。無言劇、パントマイムというものは、即ち、身振りのこの

性質を利用して藝術化したものです。舞台の中央にきつねの面をつけた役者が立つとする。向こうの方から百姓の翁が出て来る。きつねがその方へ顔を向けたが、たちまち、きつと向きなおり、足ばやに反対の方へ二、三步動く。なんにも言わなくても、見物人はこれを見て、「きつねが翁を見たな。」「驚いたな。」「逃げたな。」と合点するのであります。

もつとも、身振りの中にも、実際、おしの間に行われているものの中には特殊なものもあるので、そう／＼わかりよいものばかりではありませんが、たいていはわかりよいものです。

三 身振り語

だいたい、身振り語を分けると、次の四通りからできています。

- 第一 指示
- 第二 模倣
- 第三 象徴
- 第四 符号

指示は最も意義めいりょうで、模倣がこれに次ぎます。象徴となると少しめんどうですが、連想のはたらきで、どうやら了解が成り立つのです。例えば、自分の鼻を指さして「自分」を意味する類。鼻を指さして鼻を意味する時は第一に属しますが、自身のうちで、顔が一番代表的であり、顔のうちで、鼻が中央に位するので、この鼻をもって自身全体を代表させる。この時の意味は、象徴的なのです。なお親指と人さし指とで輪を作つて、それで「田」または「輪」を表わすならば、第二に属するので

すが、これが貨幣を意味することがあります。もつとも、これはおしでなくても、まゝやることです。「これ、持っているか。持っているなら少し貸してくれ。」など。相手が「あ、持っているよ。」と言つて、紙幣を出して貸すとする。「ありがとう。」と借りる。即ち、まるいものでお金を意味したのですから、こういうのも模倣から出て、象徴に進んでいるのです。かように、四つに分類はしましたが、

実際の場合には、二つぐらいを兼ねて行われることがよくあります。その他、くちびるを指さして赤を表わし、歯を指さして白を表わすのも象徴であり、親指をもって大を表わし、小指をもって、小を表わすのも象徴であります。さらに親指で「主人」を、小指で「主婦」を表わすのも、また親指で「強」「善」を、小指で「弱」「悪」を表わすなどにいたつては、いよいよ象徴的表現です。

象徴には、形式と内容との間に、内的関係が存在するのでありますが、第四の符号となると、こういう内的関係はなくて、全く外部の事からと身振りとが偶然結合してそれを表わすことになって來ます。それについてはこういう例があります。あるドイツのおしの学校で、生徒たちが、イギリスを表わすのに握つた両手をそろえて前方へ差し出し、フランスを表わすのに開いた手を首にあてる形をしていました。いかなる理由でそうやっていのか、わかりにくかったのですが、それは生徒たちが、イギリスについて注意していたのは、毎年テムズ河におけるオックスフォード・ケンブリッジ両大のボートレースに、ことしはオックスフォードが勝つたとか、ことしはケンブリッジが勝つたとかいう、新聞紙上の電報の記事だったのです。たま／＼そういうことから、ボートをこぐスタイルでイギリスを表わしたのだということ。フランスについてはかつて歴史を学んだ時に、ルイ十六世が

人民の手により断頭台上で処刑されたという條が、生徒たちに最も深い感動を與えたので、そのために首を切断する身振りでもフランスを想起しあつていたのでした。こういう表わし方は即ち偶然にそう
なつたもので、これが符号の例です。これらは、局外者には全くわからない身振り語であります。
こんなぐあいでは、おし的身振り語にも、われ／＼の言語同様に、時には意義の変遷もあるのであり
ます。そうになると、なおさらそれは他の人には全くわからないものになります。

四 身振り語と音声語

そこで、いよ／＼身振り語と、音声から成るわれ／＼の言語とを対照してその相違を見ることにし
ます。

まず、われ／＼の言語との第一の相違は、單語のつらねかたの順序、即ち語序です。身振り語では
形容詞が原則として名詞の後へ來ることです。例えば、「青い箱」と言うには、「箱・青」の順につら
ね、「赤い鳥」と言うには、「鳥・赤」の順につらねる。これはどこの國のおしでもみなそうだと、英
國の言語学者スウィートの言語史(History of Language)という小さな言語学の名著にうってゐます。
なおそれ以前、同じ英國の人類学者のタイラーの有名な著「原始文化」(Primitive Culture)の「身振
り語」の章にも見え、また同じ著者の「人類創世史の探究」(A Research in the Early History of
Mankind)は、「身振り語」に、二章をさいて、いっそう詳細にこのことを論究してあります。

日本のおし的身振り語もそうであることが、筆者自身の経験によつても、確かめられてあります。
今は故人となつた吉川春水という川合玉堂門下のおしの画家と、その郷里の仙台せんたいの家で会つた時のこ

とでした。筆者は、その人の東京での住まいを尋ねようとしたら、母堂が通弁してくれました。その
通弁の身振り語を筆者は今なおはっきりと記憶しています。即ち母堂はその時、左の手に長ぎせるを
持つてたばこを吸つていたので、右手だけを使いました。右手を伏せて差し出し(少し傾けて)、次に
はあごをしゃくつて、春水氏を指さし、第三番めに、右手を高くあげて遠方を指さす身振りをし、第
四番めには、またあごをしゃくつて筆者を指さし、最後に、自分の顔を傾けて目も口もあけっぱなし
にして終つたのです。すると、春水氏にはこりして、ふところからいつも用意してある鉛筆と紙片
とを取り出して、東京市小石川区水道端町百何番地と書いて私によこしてくれました。その間ほん
と一瞬、実になめらかに母堂の身振り語が了解されたその軽妙さに、私は感嘆しました。第一番の
平手を伏せてかした身振りは、屋根の斜面を表わして、家のことだったので。その次に、「おまえ」
とあごで春水氏を指さし、その次は、「あちらの」の意味で、遠方を指さしたもので、
「家、おまへの、あちらの」即ち「東京のおまへの家」なのです。その次に、筆者をあごで指さして、「この
人が」を示し、顔をかしげて目も口もあけたのは、人が物を聞く時の答を待ちもうける表情そのもの
をや、誇張してやつたので、「この人が、たずねる」とつゞけたものにほかならなかつたのでありま
す。「家、おまへの、あちらの、この人、さく」という語序です。

タイラーによくと、身振り語には、例えば「何」「だれ」というようなことばがないのだそうです。
それで、例えば「きみはけさ何をたべましたか。」とたずねるのに、「きみはけさ、飯をたべたか、も
ちをたべたか、そばをたべたか、パンをたべたか、うん。」というようにまわりくどく言わなければな
らず、また「ねばならぬ」というようなことばがないから、そこで「教場では靜かにせねばならぬ」

と言うには「教場では、騒ぐ——いけない。しゃべる——いけない。動く——いけない。けんかをす
る——いけない。黙っている——そうです。」と言わなければならぬそうです。反対のことをたくさ
ん並べて否定すると、たくさん並べるほど意味が強くなって、肯定した一つだけがそれだけ強調され、
はじめて「ねばならぬ」の意味が表わされるのだそうです。こうまわりくどいことを言わずに、われ
われが「何」と言い、「ねばならぬ」と言つて表わしうることを考えると、いまさらながら、祖先がそ
ういう單語をくふうしておいてくれたことが、ありがたく反省されて來ますと同時に、いかにわれ／＼
の言語の表現がうまく軽妙に言いなされるものであるかというところが興味深く感ぜられて來ます。直
接で意味があらわな身振りでは表わしがたい思想が、かえつて、間接であつて意味のわかりにくい音
声の方で表わしうるようになったことを思いあわせると、言語というものは、いつの世に、どんなに
して始められたものか、だれが発明したものか、いずれ、もとは、やはりそれなしに生活した長い／＼
時代をへて、必要から生まれ、だれが始めたとも知れず、こうして使ひならされて、平常はその輕妙
さをも、ありがたさをも、氣がつかずにいることではあります。が、ずいぶん不可思議靈妙なものであ
ると言わなければなりません。

五 起原は同じか

さて、身振り語にも、ひとりでは意味のわからないものが、中にはありますが、それでも、身振
りというものは、概して音声よりはわかりよくできている——少なくとも、わかりよいものが音声よ
り身振りの方に多いのであります。

この点から、「身振り語がまず生まれて、後に言語が生まれたものであろう。言語以前に、まず身振
り語が存在したはずだ。」と説く一派の言語学者があつたのです。果たしてそうでありましょうか。
ずいぶんわれ／＼の言語の中には、まず身振りで表現して、それを言語にしたものがあります。「一」
「二」「三」「四」の語原はまだわかりませんが、五つ(いつ)という語はあまたの國々の語では、「手」
という名詞と同形です。これは、「坊や、おとし幾つ。」と言うと、五歳の子が片手を突き出して見せ
るように、まだ「いつ」という数詞ができあがらないころ、手を出して「五」を示した時代があつ
たためと解釈されるのであります。

この推測を裏書きする事実が、アメリカインディアンの中にも見られます。あるアメリカインディ
アンでは、数詞はまだ一つ二つ三つまでしかできあがつていず、それ以上の数は指をもつて示し、五
つの時は片手を出し、十には両手を出し、二十には両手をだらりと下へ向けて、足の指と、合算して
くれという態度を示す。もう少し進歩したインディアンでは、一つ二つ三つ四つ五つがあつて、その
五つの語は、「手」という語であり、六つは「いま一つの手へ一つ」と言い、七つは「いま一つの手へ
二つ」と言い、同様にして十を「両手」、十一を「足へ一つ」、十二以上は「足へ二つ」「足へ三つ」「足
へ四つ」等々。さて十六以上を、「いま一つの足へ一つ」「いま一つの足へ二つ」「いま一つの足へ三つ」
と言つて表わし、二十は「ひとり終る。即ちひとり分。」と言つてそれ以上の四十、六十、八十、百
を、「二人分」「三人分」「四人分」「五人分」と言ひます。

かようにして、明らかに数を言い表わす語などは、語ができる以前、身振りですれを表現していた
ことを証明しています。その他、われ／＼の今日の語の中にも、身振りを言語にして、「うなづく」

と言つて承知を表わし、「かぶりを振る」と言つて「不承知」を表わす言い方などがあつて、身振りが先んじた表現も確かにあることを知ります。

しかしながら、すべての單語はみながみな、そういうふうにはばかりはできていないのです。すべての單語ができあがる前に、もし、身振り語のみで人間が心を表わしあつたとしたら、音声を持つ人類が、みなおしのように黙りこくつて手まねなどのみをやっていたことになるのでしようが、鳥獸でさえも、身振りばかりでなしに音声を発してさえずりかわすのです。音声を持つ人間が、音声を発せずに暮らしたことは考えられません。すべての器官というものは、用いられてのみ進歩するものであつて、決して完成してからはじめて用いられるものではないのです。だから、不完全言語の時代から、だん／＼用いられて、この音声言語が進歩発達をしたものと考えなければならぬのであります。

ことに、音声の方にも、少数ながら、ひとりでは、意味のわかるようなものも、存在するのであります。例えば、喜怒哀樂の自然の叫び、即ち間投声 (Interjection) というものは、やはり本能の叫びであつて、万人共通の自然的なものですから、通弁を要せずして、異國人どうしにさえわかるのです。次には外界の音を、われ／＼の音声でまねるもの、即ち擬声または写声 (Onomatopoeia) です。どんな・がら／＼・かん／＼・かあ／＼・ちゅうちゅう・わん／＼・にやあにやあの類です。こういう音声は人為的で、わかりよさという点では、間投声ほどではないにしても、なお外界の音に基づいて半分は自然ですから、やはり環境のあい近い間がらにあつては、通じることができたはずですよ。なお、外界の事物には音響を伴わないのに、それを象徴的に音声で表わす、びか／＼・くる／＼・ち

らちら・ぬる／＼の類になると、もはや全く人工的になつて來るので、わかりよさはぐつと落ちますが、同じ環境の人どうしには、あい近い連想がはたらくので、理解されることもありませう。

以上のような種類の音声は、相当理解されやすいもので、そのこと／＼が身振りほどわかりよくはないにしても、少なくとも第一の間投声などは、わかりよさはほとんど身振り同様で、ある人々は、これを音声身振り (Sound-gesture) と呼んでゐるくらいです。ことに、鳥や獸や、そういうものが目前にいる時なら、指さしても示されましようが、目の前にいない時には、身振りをもつてどうして表わしましよか。翼で飛ぶまねをして見せたとして、からすやら、すゞめやら區別しがたい。そこを擬声で表わせば簡単に、かあ／＼とか、ちゅうちゅうとかですぐ表わせます。いぬ・ねこ・うし・うまの類をも、わん／＼・にやあにやあ・もう／＼・ひん／＼ですぐ表わせます。その点、原始時代だとして同様なはずですから、原始時代からも、人間は、その場その場によつて、ある時は身振り、ある時は音声をういたことでしょう。いや、多くの場合、むしろ両方があわせ用いられ、あい補つて意味を表わしたものと考えられます。今でもものを言う時、どうしてもわれ／＼は全然身振り抜きで言うことができないことでもそれがわかります。即ち、音声を発しながら同時に身振りをも行つて、いずれを主、いずれを従とも言いがたい中から、長い年代の間に音声の主になつてしまつて、人類の言語ができあがつてしまいました。それについては、また、音声そのものに、他の点で身振りにまさる長所があつたからです。

六 音声の身振りにまさる点

では音声に、どういう長所があつたでしょうか。

第一に、身振りは目に訴える方法ですから、光線のある所でなければ用いてもむだです。月のない夜などはだめ。晝にしても、間にじゃま物があつて隔ててはまたなんの効もない。光線があり、じゃま物が無いとしても面々あいついていないとやはりだめ。横を向いている人にいくら目くばせしても、おいでおいでをしても通じないからです。然るに音声は、すべてこれらの條件をこえて有効であります。まっくらなやみの中でも聞え、へいや壁のかけからでもわかり、そっぽを向いている人にも通じます。

第二に、身振りは仕事に手足を取られて、行えないことがたび／＼あります。重い物を両手にかゝえていたりとか、手を動かして泳いでいる時とか、木登りさいちゅうとか、共同の敵に対して武器を持つていたりとか、右手にかさ、左手に弁当とか、そういう場合行えないことが實際多いのに、音声の方は、どうせ生息するために片時も休むことのない呼吸の息を利用するものですから、その準備は、いつでもできています。眠つていても呼吸はやまないのでから音声を出せば出ます。現に寢言をいう人もあるくらいです。

第三に、無限の変種をやす／＼と、作ることができます。身振りでもずいぶんいろ／＼なことができまするにしても、万物を区別するのに、いろ／＼に身振りを變えて表わすとなりたいへんなことです。が、音声の方ですと、わずか五十音で、これを二つ、三つ、四つずつ組み合わせると数万の語ができて、耳が専門にこれを受け取つて、たやす／＼聞き分けられます。

以上のような長所が音声にあるものですから、長い年代の間に、知らず知らず音声の方が、身振りをしのいで、長足の進歩をとげ、ついに身振りを補助の役に引きおろして、人類意志表示の最重要機

関として、言語をかように発達させるにいたつたものと考えられるのであります。

七 言語と傳承

しかしながら、ひとりではわかるといふ点では、音声は身振りに及ばなかつたものですから、そのわかりにくい音声をもととしてできあがつたわれ／＼の言語というものに、取り返しのつかない宿命的な欠点の一つ附きまつてしまいました。それは何かというのに、言語は身振り語とは違つて、一教えられなければ使えないという欠点であります。身振り語の方ならば、ひとりではわかるのですから、だれでも別に教えられなくてもできるのです。おしは勝手にくふうしてやるのですが、それがまたよく相手にわかつて、初対面でも通じます。のみならず、外國人どうしでも平氣で、通弁なしに用が足りません。アメリカのおしの学校の先生が、ハワイのおしの子を連れて学校へ帰り、教場で、自分の教え子たちへ紹介しようと思つて、おしのことを言つてゐる間に、生徒たちの目が、そこに立つてゐるハワイからのおしの子の方へ吸いつけられてゐるのに氣がついて、見ると、来たばかりのハワイの子が、アメリカの子らになれ／＼しく身振りて話をかわしてゐたのです。なんの話をしているのかと、紹介の辞をやめてじつと注意して見ると、今来た子が「ぼくは大きな船で大きな海を越えて来たぜ。その海は大きかつた。毎日毎日海ばかり、その次の日も、その次の日も……」などと話してゐるさいちゅうだつたので、初対面なのにもかゝらず、紹介通弁なしに、結構わかるのかと、先生自身驚いてしまつて、「それではこゝへあがつて、みんなに話してごらん。」と教壇にあがらせて話をさせたということがあります。また、これもアメリカでの話に、スコットランド出のおしの婦人と、

フィンランド出のおしの少年どが、はしなくも公園の同じベンチに腰かけました。さすが同じ身の上、互にそれと気がつき出して、どつちからともなく身振りて話しかけて、夢中に話しあい、しばらくぶりで身振り語で話せる相手を見出だした喜びに、とつぷり日の暮れるまで話して名残りを惜しみながら、別れたということも伝えられています。

ですからスウィートは、その「言語史」に「なまじつかな語学の知識を持つ人より、おしの方が、結構不自由なく世界一週旅行ができる。」と言っておりませぬ。

もつとも言語の方にも、文典にいう間投詞(感詞・感動詞)などア・オーの類には世界共通のものもありますけれども、擬声語になるともう民族的になつて、はわとりはコケッコとわれ／＼にはまねられますが、イギリスでは、カックズズズルズと鳴くというふうに違い、太鼓がどん／＼鳴るといふのに、ラバダブラバダブだという國もあり、ねこはにやあと鳴く(古代はネーと聞いたからネーコ、即ち「ねこ」と思うのに、ミャウ(中國)とか、ミウ(エジプト)とかいう國もあります。かつこの鳥のようにはつきりした鳴き声を持つものは、比較的共通にできていますが、赤ん坊の泣き声さえ、おぎやおぎやあとする國語もあれば、アイ／＼とする國語(英語やアイヌ語)もあつて、なか／＼一致しにくいのであります。そのほかの語彙にいたつては、國々によつて千差万別、同國語内においてもさえ方言によつて違ふのであります。ですから、われ／＼は、生まれ落ちてから、周囲の人に一語一語を必ず習い覚えて行かなければなりません。いかなる天才も、生まれながらに言語を知っているものはなく、いかなる賢人の子も、どんな博言家の子も、生まれ落ちた時はおぎやおぎやあ、だんだんダダ、ンマ／＼ンマ／＼、アブ／＼、ウンゲーから始めて、それから一つ／＼の國語をまねて

覚えます。自分がやつたように子もやり、子がやつたように孫もやり、そうして一人まえになつて、やつと一人まえにものが言えるようになります。兄がやつたように弟も、その弟も、またその弟も、はじめからみなやりなおして、ひとりだつて除外例はありません。だれもかれも一樣にそうやつて、いつさいのこばを受け継いで後の代へ傳えています。言語の傳承とはこのことです。傳承によつて、言語が民族の間に存在し発達するのです。ですから、人間の言語というものは、傳承によつて左右される存在で、決して自然的存在ではありません。鳥獸の鳴き声も廣い意味ではかれらの言語だと言へるので、言語だとすれば、あれはひとりで覚えて鳴くので、いわば自然的言語であります。これに対して人類の言語は傳承的言語(Traditional language)であります。こゝにわれ／＼の言語が身振り語と異なり、また鳥獸の言語とも相違するゆえんがあるのであります。

(金田一京助の文による)

八 制作の方法

制作の方法を考えるにあつて、諸君は、私が文学を情緒表現の藝術として定義するものであることを忘れてはならない。一体、情緒とはいかなるものであるか。その價值、その性質はいかぬ。また、それはいかにしてとらえることができるか。

情緒といへば、諸君はおそらく、涙・悲哀・後悔の類を思い浮かべるであろう。しかし、これは私という情緒ではない。われ／＼はまずきわめて簡単な種類の情緒——一本の木に対する情緒について

考察することから始めよう。

諸君が一本の木をながめる時、諸君の内部には二つの事象が生起する。第一には、視覚を通して脳裏に投影された木の影像——即ちその木の小さい写真ができる。これがその木の興える感覚であるが、しかし、この影像はことばで描写しようとしても不可能であり、よしまたできたところで、それはほとんど藝術的價値のないものである。しかし、これとほとんど同時に、諸君はこの第一の印象とは性質の異なる、第二の印象を受ける。諸君は、その木が諸君にある種の特異な感情を興えることに気がつく。これは、その木に一定の性格があつて、それを諸君が知覚するからである。この性格の知覚がその木に対する感情もしくは情緒であつて、これこそ藝術家の求め、詩人の求めるところのものである。

すべて事物は、生物でも無生物でも、それを見る人の心に、ある感情を起させるものであつて、この意味において、すべての事物には「顔」があるともいわれよう。諸君が初対面の人に会つてその顔を見る時、まず受けるものは感覚的印象であるが、すぐそれに続いて一種の感情が起つて来る。即ち、その顔を好むか好まないか、あるいは比較的無関心でいられるかである。こういうことは、人間の顔に關しては何人も経験するところであるが、藝術家や詩人は事物に關してもこれを經驗する。即ち、藝術家や詩人が他の人々と異なるところは、かれらはいわゆる事物の「顔」、即ちその性格を知覚する点にある。木でも山でも家でも、石でさえも、藝術家の目から見れば「顔」があり、性格がある。われわれも適当な方法によつて修練を續けて行く時は、かくのごとき事物の性格を認識しうるにいたるものである。

これで、私のいわゆる情緒、即ち作者のとらえ表わさんとする感情、あるいは情緒のいかなるものであるかは、ほとん明らかになつたことと思う。われわれはこの上もなく簡単な標本、即ち一本の木に對する情緒について考察した。しかしながら、文学において取り扱われるいっさいの事物、いっさいの想像、いっさいの存在は、嚴密にこれと同じ方法で考えられなければならない。かくていかなる場合にも、作者の目的はその物の性格を把握し決定することであつて、かれはその物がかれの心に引き起した感情を如実に表現することによつてのみ、これを成就することができる。これが文学の主要な任務であるが、同時にまたきわめて困難な作業である。

感情の起る時はどんな現象が現われるか。諸君は、喜びか苦しみか恐れか驚きかの、瞬間的なわななきを感じる。しかしこのわななきは、突如として來たごとく、突如として去る。それが消え去ると同様に敏速に、それを書きとめることはできない。その時、諸君の心に残っているのは、その物の感覺即ち第一印象と、感情の單なる記憶とに過ぎない。人の性質の異なるにしたがつて感情の動き方も相違があるから、ある性質の人々には感情が比較的長く残ることはあろう。が、いずれにせよそれは立ちのぼる煙のごとく、風に漂う香のごとく、はかなく消え去るものである。諸君がもし、この感情が起るやいなや、突如にそれを紙上に写しうる人があると思つたら、それは大なる誤りであつて、これははげしい労作によつてはじめてなしとげられるものである。その労作とはいったん受けた感情を再生させることである。

感情を再生させようとする時、はじめ諸君は、眠りから覺めて夢を思い出そうとする人と同じ状態にあるであらう。夢を思い出すことがいかにむずかしいかは、お互に知ることである。しかし、そ

うことを疑わぬ。そして、そうすることが文学の任務であると、かつては私も言った。しかし、もし諸君にこの作品を私が文学と言うかと聞かれたら、私は「いな、それはジャーナリズムである。短時間に、したがって不完全に書きなぐられたものであって、文学の鉱石ではありえても、眞の意味の文学ではない。」と答える。諸君はあるいは言うであらう。「公衆はそれを文学と呼び、文学として扱ってくれる——それ以上に何を要求するのか。」と。

安價な文学は当座はかえって割がよく、眞の文学は全く割に合わない。しかし、偉大な作家によって書かれたすぐれた作品は、諸君がそれをくり返して読むたびごとに美しさを増して来る。そして、幾代にわたり幾世紀にわたって、これを読む人々に対していよ／＼ますますその美を發揮して行く。しかるに安價な文学は、最初の一読にはこういう傑作よりもかえっておもしろいこともあるが、二度めには欠点が見えはじめ、三度、四度と読み返すにしたがって、ますますそれが目について来て、そのために読者は全く興味をそがれ、ついには嫌悪のあまりそれを投げ出すにいたるであらう。一般公衆は、長い間にこれと同様のことを行っているのである。かれらはきょう愛読しているものを、あすは投げすてて顧みない。そしてそれが正当である。なぜならば、それは丹精をこらした作ではないのだから。

すべて一般的説明には多少の除外例のあることはまぬかれたいが、だいたいにおいて、いずれの國語においても、古典と呼ばれるものは必ず完全な仕上げを示しているものであるといつても過言ではないと信ずる。

(小泉八雲原作―田部隆次の訳による)

九長 歌

万葉集

水江浦島子を詠める一首並びに短歌

春の日の かすめる時に 住吉の 岸に出でゐて つり船の とをらふ見れば いにしへ
 への 事ぞおもほゆる 水江の 浦島子が かつをつり たひつりほこり 七日まで
 家にも來すて 海界を 過ぎてこぎゆくに わたつみの 神のをとめに たまさかに
 いこぎむかひ あひとぶらひ こと成りしかば かき結び 常世にいたり わたつみの
 神の宮の 内の重の たへなる殿に たづさはり ふたり入りゐて 老いもせず 死にも
 せずして 永き世に ありけるものを 世のなかの おろかびとの わぎもこに のり
 て語らく しましくは 家に歸りて 父母に 事ものらひ あすのごと われは來なむ
 と いひければ 妹がいへらく 常世べに また歸り來て 今のごと あはむとならば
 このくしげ 開くなゆめと そこらくに かためし言を 住吉に 歸り來たりて 家見
 れど 家も見かねて 里見れど 里も見かねて あやしと そこにおもはく 家ゆ出で
 て 三とせのほどに かきもなく 家うせめやと この箱を 開きて見れば もとの
 ごと 家はあらむと 玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世べに たな
 びきぬれば 立ち走り 叫びそで振り こいまるび 足ずりしつゝ たちまちこ
 ろ消失せぬ 若かりし はだもしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆな／＼は

へ絶えて のちつひに いのち死にける 水江の 浦島子が 家どころ見ゆ

反歌

常世べに住むべきものをつるぎたちなが心からおそやこのきみ

月の兎

良 寛

いそのかみ 古りにし御代に ありといふ 猿とをさぎと 狐とが 友を結びて あし
たには 野山にあそび ゆふべには 林にかへり かくしつゝ 年のへぬれば 久方の
天の帝の 聞きまして それがまことを 知らむとて 翁となりて そがもとに よろ
ぼひ行きて 申すらく いましたぐひを ことにして 同じ心を 遊ぶてふ まこと聞
きしが ごとならば 翁が飢ゑを すくへと つゑを投げて いこひしに やすきこ
ととて やゝありて ましはうしろの 林より 木の实拾ひて 來たりたり きつには
前の 川原より 魚をくはへて あたへたり をさぎはあたりた とびとべど 何もも
のせで ありければ をさぎは心 異なりと のしりければ はかなしや をさぎは
かりて 申すらく ましらはしげを 刈りて來よ きつにはこれを 焼きてたべ いふ
がごとくに なしければ 煙の中に 身を投げて 知らぬ翁に あたへけり 翁はこれ
を見るよりも 心もしぬに 久方の 天をあふぎて うち泣きて 土にたふれて やゝ
ありて 胸うちたゝき 申すらく いまし三たりの 友だちは いづれ劣ると なけれ
ども をさぎはことに やさしとて からを抱へて 久方の 月の宮にぞ はよりける

今の世までも 語りつき 月のをさぎと いふことは これがもとにて ありけると
聞くわれさへも 白たへの 衣のそでは とほりてぬれぬ

鉢の子

良 寛

はちの子は はしきものかも しきたへの 家出せしより あしたには かひなにか
けて 夕べには 手上にのせて あらたまの 年のを長く 持たりしを けふよそに
忘れて來れば 立つらくの たづきも知らず をるらくの すべも知らず かりこも
の 思ひみだれて ゆふづつの か行きかく行き 谷ぐくの さわたる底ひ あまぐも
の むかふすきはみ 天地の よりあひの限り つゑつきも つかずも行き 求めな
むと 思ひし時に はちのこは こゝにありとて わがもとに 人は持て來ぬ いかな
るや 人にませかも ちはやぶる 神ののりかも ぬばたまの 夜の夢かも うれしく
も 持て來るものか よろしなべ 持ち來るものか そのはちのこを

道のべのすみれつみつゝはちのこを忘れてぞ來しそのはちのこを
はちのこをわれ忘れど取る人はなし取る人はなしはちのこあはれ

十羽 衣

謠 曲

漁夫白龍いさなりゅう

同行漁夫

ワキツレ

天女

ワキツレ「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。

ワキツレ「万里の好山に雲たちまちに起り、一楼の明月に雨はじめ晴れたり。げにのどかなる時

ワキツレ「しがや、春のけしき松原の波立ち続く朝がすみ、月ものこりの天の原、及びなき身のながめに

も、心空なるけしきかな。

忘れめや、山路をわけて清見瀨がみ、はるかに三保の松原に、立ちつれいざや通はん。風向かふ

雲の浮き波立つと見て、つりせて人や帰るらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風

の、松は常磐とこしほの声をかし。波は音なき朝なぎに、つり人多き小舟かな。

ワキツレ「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむるところに、虚空こくうに花ふり、音楽聞え、靈香れいこう

四方に薫ず。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。寄りて見れ

ば、色香たへにして常の衣にあらず。いかさま取りて帰り、古き人にも見せ、家の宝となさば

やと存じ候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキツレ「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて帰り候よ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に興ふべきものにあらず。もとのごとくに置きたまへ。

ワキツレ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめお

き、國の宝となすべきなり。衣を返すことあるまじ。

シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行ひやうりゅうのみちも絶え、天上に帰らんこともかなふまじ。さりとは返

したびたまへ。

ワキツレ「この御ことばを聞くよりも、いよ／＼白龍方を得、詞「もとよりこの身は心なき、天の羽衣

取り隠し、謠「かなふまじとて立ちのけば、

シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、あがらんとすれば衣なし。

ワキツレ「地にまた住めば下界なり。

シテ謠「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、

ワキツレ「白龍衣を返さねば、

シテ謠「力及ばず、

ワキツレ「せんかたも、

地謠「涙の露の玉かづら、かざしの花もしを／＼と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謠「天の原、ふりさけ見れば、かすみ立つ、雲路まどひて行く、へしらすも。

地謠「住みなれし、空にいつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽かりょうびんがのなれ／＼し、声

いまたさらになづかなる、かりがねの帰り行く、天路を開けばなつかしや。ちどり・かもめの沖

の波、行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキツレ「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御いたはしく候ほどに、衣を返し申さうず

るにて候。

シテ詞 「あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。

ワキ詞 「しばらく。承りおよびたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏したまはば、衣を返し申すべし。

シテ詞 「うれしや。さては天上に帰らんことを得たり。この喜びに、とてもさらば、人間の御遊のか

たみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さり

ながら、衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返したまへ。

ワキ詞 「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさてそのまゝに、天にやあがりたまふべき。

シテ詞 「いや、疑ひは人間にあり。天に偽りなきものを。

ワキ詞 「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、

シテ詞 「をとめは衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

ワキ詞 「天の羽衣風に和し、

シテ詞 「雨にうるほふ花のそで、

ワキ詞 「一曲をかんで、

シテ詞 「舞ふとかや。

地謡 次第 「東遊の駿河舞、この時やはじめなるらん。

クリ 「それ久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなけれ

ばとて、久かたの空とは名づけたり。

シテ サシ 「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、

地謡 「白衣、黒衣の天人の、数を三五にわかつて、一月夜々の天をとめ、奉仕を定め役をなす。

シテ詞 「われも数ある天をとめ、

地謡 「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

クセ 「春がすみたなびきにけり、久かたの、月のかつらも花や咲く。げに花かづら色めくは、春の

しるしかや。おもしろや、天ならでこゝもたへなり天つ風、雲の通ひ路吹きとぢよ。をとめの

姿しばしとどまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見瀧、富士の雪、いづれや春のあけ

ぼの。たぐひ波も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん玉垣の、内

外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。

シテ詞 「君が代は、天の羽衣まれに來て、

地謡 「なづとも盡きぬいはほぞと、聞くもたへなり東歌。声そへてかずくの笙・笛・琴・篳篥、

孤雲のほかにも充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、緑は波に浮島がはらふあらし

に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲のそでぞたへなる。

シテ詞 「南無帰命月天子、本地大勢至。

地謡 「東遊の舞の曲、

シテワカ 「あるひは天つ御空の緑の衣、

地謡 「または春立つかすみの衣、

シテ詞 「色香もたへなり、をとめの裳裾、

地謡 「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽そで、なびくも返すも舞のそで。

キリ「東遊の数々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、満月真如の影となり、御願田満、
 國土成就、七宝しちぼ充滿の宝をふらし、國土にこれを施したまふ。さるほどに時移つて、天の羽衣
 浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山あしたかや富士の高ね、かすかになりて、
 天の御空のかすみにまぎれて失せにけり。

中 等 國 語
 三
 (1)

APPROVED BY MINISTRY
 OF EDUCATION
 (DATE Mar. 14, 1947)

昭和二十二年三月十四日印刷 同日釐刻印刷
 昭和二十二年三月十八日発行 同日釐刻発行
 (昭和二十二年三月十八日 文部省検査済)

定 價 金 二 四 八 十 五 錢

著 作 權 所 有

著 者 兼 行 者

文

部

省

發 行 者 刻

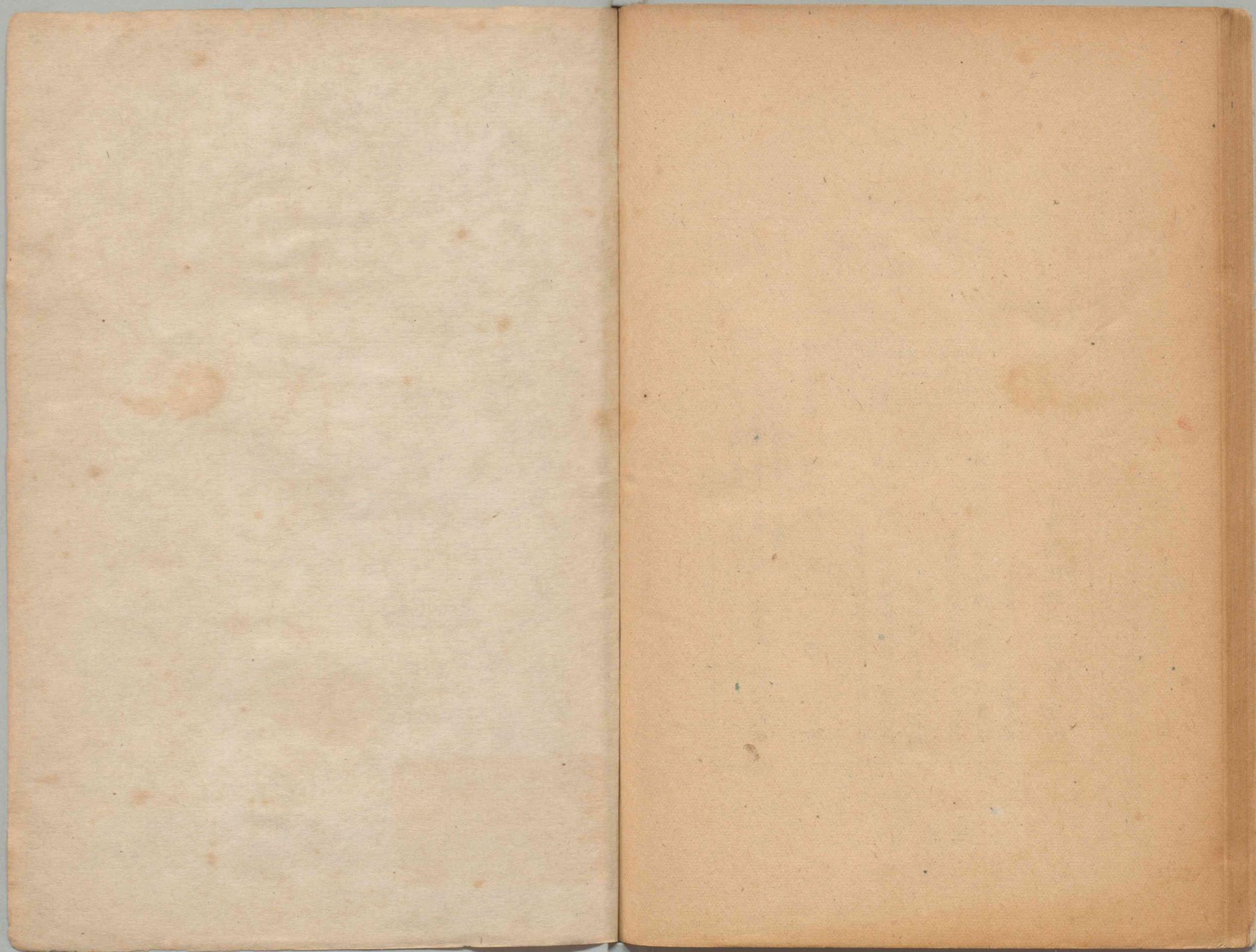
東 京 都 千 代 田 区 神 田 岩 本 町 三 番 地
 中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社
 代 表 者 阿 部 眞 之 助

印 刷 者

東 京 都 牛 込 区 市 谷 加 賀 町 一 丁 目 十 二 番 地
 大 日 本 印 刷 株 式 會 社
 代 表 者 佐 久 間 長 吉 郎

發 行 所

中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社



広島大学図書

0130449844

